

「文化と型」に寄せて——公開講座のこと

渡部 武

—

文化学科の出番ですよという次第で、公開講座を開く羽目となった。だが、いったい公開講座なるものは何なのか。学校教育法は「大学においては、公開講座を設けることができる」という。社会教育法は「学校の管理機関は、……文化講座、専門講座、夏期講座、社会学級講座等……社会教育のための講座を開設することを求めることができる。文化講座は、成人の一般的教養に関し、……大学、高等専門学校又は高等学校において開設する」という。このあたりがぶつかって文化講座としての公開講座が大学で開かれることになる。そして、いまや国民の大多数は中流意識をもち、暮しは豊かに思いも高く、文化・教養へとなびいている。「大学開放の促進について」という社会教育審議会の答申は、もうとうの昔二〇年前に出ている。かくなれば、街にカルチャー・センターが花開くのとやらんで、大学の公開講座のビラが電車やバスにぶらさがるといふことになるのは、当然至極のことである。

こんなときに、公開講座とは何かわからない、わからないことはできないなどといって、やろうとしないのはサボリたいからだろう。文化を名とするわが学科にできないはずはないという次第で、何が何だかわからないまま企画実施することとなる。個人はサボリたかつたし、それを認める寛容さがほしかつた。やったからといって意気が拳がるわけでもなし、一年空白になったからといってダメになるはずもない。事と次第によっては、サボルことはよいことだし、サボラせることはより一そうよいことである。島のネズミが一齐に走り出して海に入り全滅するという話がある。

文化的な公開講座をやるのになんでそんな話しになるのかと叱られそうである。文化はわが学科の主題である。教育基本法には日本の目標は民主的で文化的な国家の建設であると示されている。大学の開放、地方の社会教育への貢献、しかも文化を通してである。ぐずぐず言わずに素直にやれないものか。立場の違う人の言動を人はいつもそう感ずるものである。しかし、素直になれといえても強制はできない。ついでに、素直でないものもそれで仕方がないことにしたいものである。素直でないのが因となって果を招き、公開講座はどういう趣旨で、何を、どうやるかという具合に一からはじめることになった。苦心のはてに企画の趣旨を次のように宣言した。

近年、人々の文化への関心が高まり、文化についての議論が活発になっていく。

この機会をとらえて、本学では、本年度は日常身の事象のなかに文化を発見し、型という観点から文化を理解し把握することを目標に、「文化と型」をテーマに公開講座を行う。

公開講座の目標は「文化の理解・把握」と簡潔に示した。「市場の幻影」(ベイヤン)は文化ということばにもついてまわる。文化の定義は数々あり、文化の分類は様々である。それにもかかわらず文化の一語でお互いにすべて了解したつもりでいる。その結果「文化」ということばは華やかに飛び交って文化の危機が迫ってくるという事態になる。仏教に真言、わが国に言霊ことばまということがある。忌み言葉という慣習は今でも生きている。ことばを粗末にする報いはこわい。文化をテーマとしてとりあげることの意義は大きい。文化の理解・把握を一回の公開講座に期待することはできない。受講者に文化の理解・把握の緒をつかんでもらえればというささやかな志によって公開講座を具体化した。

二

文化をテーマとする場合、切り込む観点が問題となる。受講者が多様であること、一般教養のための講座であることから考えると、講義はなるべく具体的であることが望ましい。そこで、一般に馴染みの薄い点が気がかりではあったが、文化人類学という「型」(R・ベネディクト『文化の型』他、参照)をかりることにした。たとえば、人間尊重の精神というと抽象的概念であるが、それは文化とし

てそれぞれの社会・民族において具体的な生活の仕方となって存在し、固有の型をもつ。人を訪問するとき、わが国では玄関先でコートを脱いで入る。それが相手への礼であり、相手を尊重することである。欧米ではコートのまま入り、相手の許しがあつて脱ぐ。人間尊重といつても、わが国のコートを脱ぐ型と欧米の脱がない型とは正反対となる。文化の型は觀念や思想と一体である。この型から切り込むことは、文化を理解・把握するうえで適切であると考え、「文化と型」をテーマと決定した。このテーマのもとで、さらにわかりやすくということになれば、材料を日常身の事実を求めるのがよい。人間にとつてもっとも身近かで根本の生活事實は衣食住である。そのための労働であり、社会関係である。自己保存、種族保存の子育てである。ところで、衣食住・労働・社会関係・教育では、「文化と型」というテーマの影響もあつて、人間の動的な営み、生き生きとした文化の姿が消え、文化遺産として博物館に陳列されているような姿になる。それを避けて、講義題目は「たべる」(講師の交替で「遊ぶ」となる)「はたらく」「つきあう」「そだてる」とならなくてはならないということにおちついた。

ここでまだ何が足りない、なんだろうということになる。英語のカルチャーの語源は「耕す」である。自然に人間が手を加える人工が文化ということになる。ことばとしては自然と文化とは対立概念とされるが、実際には自然とかわりをもたず、あるいは自然を一方的に否定して文化が成立するわけのものではない。このことについては、公害や環境破壊の問題が深刻であることが、その根拠となる。文化を問うとき文化のいない手である人間を問い、文化の土台である自然を問うとき、人間のうちの自然つまり動物としての側面を問うことが必要であり、文化の動物的基礎が明らかにされなくてはならない。文化の理解・把握のうえで動物行動学の成果が参考にされなくてはならない。そこで「たべる」「はたらく」「つきあう」「そだてる」という動詞の「生物学的基礎」についての講義を行ふこととなった。

枠組みが出来たが、やればよいというものではない。講座を有効・有意義にすすめなくてはならない。主催する者としての受講者への当然の配慮を必要とする。何をもちてその当然の配慮とするのか。これまたわからない。欧米人は首をいためるが、われわれは日本人なので頭をいためた。そして次のような配慮を行った。

テーマ「文化と型」、講義題目「たべる」「はたらく」「つきあう」「そだてる」では受講者に見当がつかねるのではないか。それゆえに、公開講座の狙いとその展開の見取り図を受講者に持つてもらおう、そのためにオリエンテーションを行う。一日一題目とし講義時間を十分とする。質疑応答をみるりあるよう、十分時間をとり、予め質問紙を配付しておくなどの工夫をする。主催者・講師・受講者の間の疎通をはかるため第一日目に懇親会をもつ。さまざまな配慮工夫をした結果、左記のように「文化と型」は具体化し、実施された。本号はその記録を中心に小特集を組んだものである。

講座日程表

- 一〇月六日 オリエンテーションⅡ人間と文化（渡部 武）・動詞の生物学的基礎（日高敏隆）
 一〇月一三日 あそぶ——儀礼と芸能の間（新谷尚紀）・質疑応答（司会Ⅱ藤崎康彦）
 一〇月二〇日 はたらく——江戸の職人の世界（芝 三光）・質疑応答（司会Ⅱ藤崎康彦）
 一〇月二七日 つきあう——実際の文化人類学（渡邊欣雄）・質疑応答（司会Ⅱ大江一道）
 十一月三日 そだてる——〈教育〉の原型を求めて（川本隆史）・質疑応答（司会Ⅱ渡部 武）

（わたなべ たけし・専任・日本思想史）